

## 老年看護実習における臨床指導者研修会の意義と効果

福田和美\*, 赤木京子\*, 渡邊智子\*

### The Meaning and Impact Clinical Leader Training Association in Gerontological Nursing Practice

Kazumi FUKUDA, Kyoko AKAGI and Tomoko WATANABE

#### 要 旨

老年看護実習に際し、初めて実習をひきうける A 病院の学生指導に関する看護師、介護士に対して、高齢者擬似体験を行うことで、自分自身の高齢者看護を振り返り、今後の老年看護実習指導につなげることを目的に研修会を実施した。研修会の意義と効果を検討するためにそのときのグループディスカッション後の発表内容の分析を行い、研修会終了後6ヶ月に研修会に関するアンケート調査を行った。研修会の参加者は、研修会に参加することにより、これまでの自分自身の看護を振り返るとともに看護の価値の変換を行っていた。また、研修会の効果として、学生指導の場で、研修会で得たことを活かし、指導者としての役割の自覚につながっていた。今後は、研修会で役に立ったことが効果的に活かせるような、フォローアップ研修の実施も視野に入れていく必要があると思われる。

キーワード：老年看護実習，臨床指導者，研修会，高齢者擬似体験

#### はじめに

本学における老年看護実習は、高齢者が生活する場において、学生が老年期にある人の特徴を理解し、高齢者の生活を支援する基礎的能力を養うことを目的とし、平成17年度より介護老人保健施設での実習を行っている。平成18年度からは、介護老人保健施設のみならず、地域の中核となる回復期リハビリテーション病院や療養型病床を有する病院でも実習を行っている。臨地実習は、看護教育の中における重要な科目であり、教員や実習指導者（以下指導者とする）の直接的な関わりが、学生の学習効果に大きな影響を与える。しかし、実習を受け入れる施設の中には、初めて学生を受け入れる施設もあり、指導者やスタッフの戸惑いや緊張が伺えた。田中ら（田中，浅尾，2004）の調査から、指導者の悩みや困難の内容として、約8割近い指導者が指導能力の自信のなさを感じていることや約2割の指導者が学生を理解することができないという悩みを抱えてい

ることが明らかになっている。今回、初めて老年看護実習を受け入れるA病院において、指導者や病棟スタッフが自分自身の高齢者看護を振り返り、円滑な学生指導を行うことができることを目的に指導に携わる者に対する研修会を実施した。そこで、老年看護実習前の指導者や病棟スタッフらにとっての意義、効果を明らかにし、今後の研修会のあり方について検討することを目的に研究を行った。

#### 老年看護実習指導者研修会の概要

##### 1. 研修目的

高齢者擬似体験を行うことで、自分自身の高齢者看護を振り返り、今後の老年看護実習指導につなげる。

##### 2. 研修期間：平成19年9月10日～11日

##### 3. 研修内容

1) 1日目：高齢者擬似体験

(1) 2人一組となり、高齢者役と看護・介護士役となり、課題を実施する。(表1)

\*福岡県立大学看護学部老年看護学講座  
Department of Gerontological Nursing, Fukuoka Prefectural University  
連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395番地  
福岡県立大学看護学部老年看護学講座 福田和美  
E-mail:kfukuda@fukuoka-pu.ac.jp

表1 高齢者疑似体験課題

廊下歩行
エレベーターの乗降
階段昇降
外出
公衆電話の使用
文字の読み書き

- (2) 交代して、高齢者役と看護・介護者役を体験する。
- (3) グループ間で体験を共有し、3～4人のグループの体験をもとに高齢者看護を振り返り、発表する。
- 2) 2日目：学生指導に関するワークショップ
- (1) 看護学生に対する期待について、グループ間でディスカッションを行い発表する。
- (2) 指導者としての学生との関わりにおける、学生の行動の予測とそのときの指導者としての関わりの予測について、グループ間でディスカッションを行い、指導者としての関わりの方向性を発表する。

#### 4. 参加者

参加者は、本学の老年看護実習を始めて受け入れるA病院の学生指導に携わる予定の看護師および介護士。研修会に参加した人数は、1日目の高齢者疑似体験には10名、2日目の実習指導に関する研修には10名であった。高齢者疑似体験は、看護師8名、介護士2名が参加し、実習指導に関するワークショップは、看護師8名、介護士2名が参加した。ほとんどの者が両日参加し、学生指導未経験者であった。

### 研究方法

#### 1. 研究期間

平成19年9月～平成20年6月

#### 2. 調査対象者

老年看護実習指導者研修会に参加した参加者10名

#### 3. 調査内容および分析方法

- 1) 研修会で用いたワークシートの項目に対してグループディスカッションを行い、発表内容を記述したワークシートを分析対象とした。
- 2) 研修会で実施したグループワークの発表内容を、「高齢者疑似体験の体験からの看護の振り返り」と「看護の振り返り」、「看護学生に期

待すること」、「実習指導者としての関わり」の4つに視点でそれぞれ内容分析を行い、抽出されたコードを類似比較しながらサブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。なお、分析過程においては、共同研究者間で討議を重ね信用可能性の確保に努めた。

- 3) 研修会には、看護職と介護職の双方が含まれていたが、分析過程において、介護職特有な結果は見出すことができなかった。そのため、分析の視点を看護の視点として分析を行った。
- 4) 次回の実習が始まる前の研修終了6ヵ月後に、研修会に参加して、役に立ったことや活用したことについてアンケート用紙を研修参加者に配布し、参加者の自主的な提出により回収した。アンケート用紙の内容に関しては、単純集計を行い、自由記述に関しては、内容の分析を行った。

#### 4. 倫理的配慮

研修会参加者には口頭にて、研究の目的方法を伝え、研究協力は自由意志であること、研究協力しなくても不利益が被らない事、個人が特定されることなくプライバシーの保護を遵守すること、データ保管の厳密性など伝え、同意を得た。

### 結果

#### 1. 高齢者疑似体験

研修会の発表内容の分析より、表2に示すように高齢者疑似体験は『疑似体験から感じた心身の変化』、『自己の高齢者看護の振り返り』、『必要だと感じた高齢者看護』の3つに分類された。『疑似体験から感じた心身の変化』は、「運動機能の低下」、「感覚機能の低下」、「身体変化に伴う高齢者心理」であった。これは、体験者が関節可動域の狭さや歩行速度の低下など、行動を行ったことによる身体の動きにくさを感じたことや視野の狭窄や加齢変化として、明暗に対する順応性の低下を感じたこと、階段昇降時の視線や介助者の位置など普段行っている自分自身の行動の変化から、恐怖心などの高齢者の心理状態を感じていたことであった。『自己の高齢者看護の振り返り』に関しては、「高齢者の行動の再認識」、「依存ではない高齢者の姿」「相手の目線でものを見ること」であった。これは、疑似体験を行うことで、体験者は高齢者と自分の相違を感じ、今まで高齢者のペースに合わせていなかった自分に気づいたことや時間のかかる高齢者の行動の理解を行っていたこ

表2 高齢者疑似体験からの看護の振り返り

カテゴリー	サブカテゴリー
疑似体験から感じた心身の変化	運動機能の低下
	感覚機能の低下
	身体変化に伴う高齢者の心理
自己の高齢者看護の振り返り	高齢者の行動の再認識
	依存ではない高齢者の姿
	相手の目線でものを見ること
必要だと感じた高齢者看護	行動を予測した関わり
	高齢者の立場に立つこと
	自立と介助の見極め
	孤独や不安の理解と支援

とであった。また、疑似体験を行うことで高齢者が身体機能の低下により行動することの怖さを感じ、依存と思っていた姿が依存ではない姿であったことを認識したことである。さらに、高齢者疑似体験を行って、高齢者の目線でものを見ていないまま看護ケアを行っていた自分に気づいていた。『必要だと感じた高齢者看護』に関しては、「行動を予測した関わり」、「高齢者の立場に立つこと」、「自立と介助の見極め」、「孤独や不安の理解と支援」であった。これは、高齢者の行動にかかる時間の長さやペースを考慮して、行動の予測をした関わりの必要性を感じたことや身体的機能の低下や高齢者の心理状態を踏まえた看護の必要性を感じていたことであった。また、自立できているのか、介助が必要なのかを見極める目を持つことの必要性や高齢者が抱えている孤独や不安に着目し、理解したうえでの支援の必要性を感じていた。

## 2. 看護学生に期待することと指導者としての関わり

看護学生に期待することには、表3に示すように『高齢者看護』、『自立に向けた援助』、『他職種との連携』、『看護学生としての態度』の4つに分類された。『高齢者看護』は、「認知症への対応」、「高齢者特有の看護」、「コミュニケーション」、「高齢者を尊重」、「個別性を持った関わり」であり、増加する認知症高齢者や世代の異なる高齢者との関わりや高齢者の身体機能や生活状況など個別性を重視するとともに相手を敬う看護を期待していた。『自立に向けた援助』は、「残存機能を生かした看護ケア」、「ADL低下予防に向けた援助」、「生活の中でのリハビリ」、「自立している高齢者への配慮」であり、リハビリを行う高齢者の機能低下予防や高齢者の持っている力を引き出し、看護ケアに活かすことや自立している高

表3 看護学生への期待

カテゴリー	サブカテゴリー
高齢者看護	認知症への対応
	高齢者特有の看護
	コミュニケーション
	高齢者を尊重
自立に向けた援助	個別性を持った関わり
	残存機能を生かした看護ケア
	ADL 低下予防に向けた援助
	生活の中でのリハビリ
他職種との連携	自立している高齢者への配慮
	リハビリスタッフや介護士との連携
看護学生としての態度	言葉遣い
	挨拶の仕方
	他者への配慮

齢者を見守ることやリスクマネジメントなどの細かい配慮を期待していた。『他職種との連携』は、「リハビリスタッフや介護士との連携」であり、他職種との連携を図り、高齢者へのチームアプローチを学んでほしいという期待をしていた。『看護学生としての態度』は、「言葉遣い」、「挨拶の仕方」、「他者への配慮」であり、学生として的高齢者への基本的な態度やあり方、受け持ち以外の高齢者への関わりに期待していた。

指導者としての関わりは、『学習環境を整える』、『モデルになる』、『思考の導き』であった(表4)。『学習環境を整える』は、「病棟の雰囲気作り」、「指導者の雰囲気作り」、「学生とのコミュニケーション」であり、学生を暖かく受け入れるという病棟全体の雰囲気や学生とコミュニケーションを持つこと、質問しやすい指導者自身の雰囲気作りを行うことで

表4 指導者としての関わり

カテゴリー	サブカテゴリー
学習環境を整える	病棟の雰囲気作り
	指導者の雰囲気作り
	学生とのコミュニケーション
モデルになる	認知症への対応
	情報収集の方法
	言葉遣い
	学生が高齢者に好感が持てるような関わり
思考の導き	学生がしたいことの方角付け
	学生の思考の表出
	学生と共に考える

あった。『モデルになる』は、「認知症の対応」, 「情報収集の方法」, 「言葉遣い」, 「学生が高齢者に好感が持てるような関わり」であり, 指導者があらゆる場面で, 学生のモデルになるような高齢者との関わりをすることであった。『思考の導き』は、「学生がやりたいことの方角付け」, 「学生の思考の表出」, 「学生と共に考える」であり, これは, 学生と共に考え, 思っていることの方角付けや言語化し, 表出することができるような関わりであった。

### 3. 研修会の効果

研修会終了6ヵ月後のアンケートの回収率は, 1日目, 6名(回収率60%), 2日目7名(回収率70%)であった。アンケートの結果を図1, 2, 表5, 6に示す。1日目の高齢者擬似体験では, 大変役に立った3名(50%), 役に立った3名(50%)であった。「あまり役に立たなかった」, 「役に立たなかった」はいなかった。役に立った内容は, 看護・介護実践が最も多く, 次に新人教育, 学生指導であった。また看護・介護観の構築にも役に立ったと2名が回答していた。役に立った具体的内容としては, 回答者が3名であ

表5 研修会に参加して役立った具体的内容

具体的内容		人数
1日目 高齢者擬似体験	・体験を高齢者ケアに活かした(環境整備、移動介助)	3
2日目 実習指導	・他者の意見を聞くことで別の視点を持たた	2
	・実習のイメージがついた	1
ワークショップ	・指導者としての自覚	1

表6 研修会に参加して得た事の活用

具体的内容		人数
1日目 高齢者擬似体験	・学生指導、職員教育に活用	3
	・高齢者の特徴を看護計画立案に活用	1
	・他者に高齢者を理解してもらうために話をすること	1
2日目 実習指導	・学生の立場になり、考えること	1
ワークショップ		

り, すべて『体験を高齢者ケアに活かした(環境整備, 移動介助)』であった。研修会で得たことの活用としては, 『学生指導や職員教育に活用』2名や『高齢者の特徴を看護計画立案に活用』1名, 『他者に高齢者を理解してもらうために話をすること』1名であった。

2日目の学生指導に関しては, 大変役に立った1名(14%), 役に立った6名(86%)であった。「あまり役に立たなかった」, 「役に立たなかった」はいなかった。役に立った内容は, 看護観・介護観が3名と一番多く, 次に学生指導2名, その他(新人教育, 他の施設の実習生指導)2名であった。役に立った具体的内容としては, 『他者の意見を聞くことで別の視点を持つことができた』が2名, 『実習のイメージがついた』1名, 『指導者としての自覚』1名など, 指導者としての自身の変化も見られていた。研修会で得たことの活用としては, 回答者が1名であり, 『学生の立場になり考える』であった。

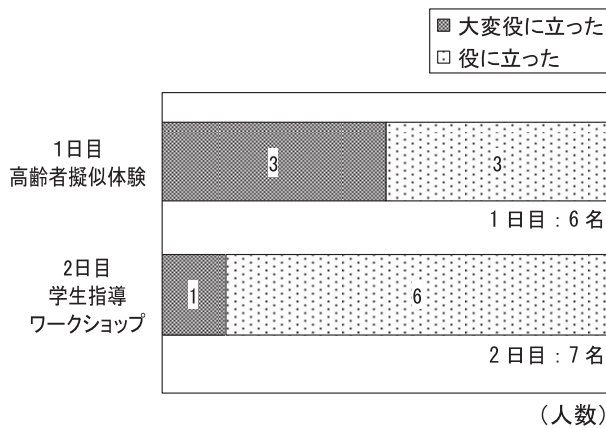


図1 研修会は役立ったか

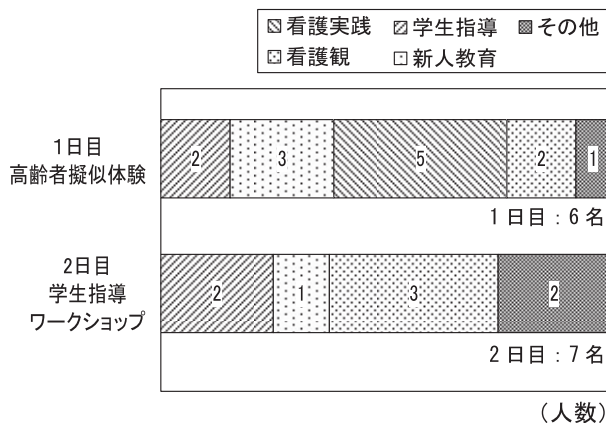


図2 研修会で役立った項目 (重複回答)

### 考察

#### 1. 実習指導者研修会で高齢者擬似体験を行う意義

高齢者擬似体験を行った看護師らの体験の振り返りを分析した結果, 『疑似体験から感じた心身の変化』, 『自己の高齢者看護の振り返り』, 『必要だと感じた高齢者看護』と3つに分類することができた。特に『疑似体験から感じた心身の変化』はほとんどの看護師が実感していた。高齢者擬似体験に関する報告については, 看護学生の高齢者理解やイメージの変化に関する報告が多く, 看護師を対象にした報告は少ない。荒井, 山本(2005)は看護師を対象に,

外来患者の場面を想定し、擬似体験を実施した結果、高齢者の身体的機能の低下を体感することで、高齢者に対するイメージの違いの認識と共に外来患者の援助を考える機会になったと述べている。本研修会においても身体的機能の変化を捉えた看護師は多く、身体的機能の変化を体感することで、「行動を予測した関わり」など『必要だと感じた高齢者』を考える機会になっていた。しかし、身体的機能のみならず、「身体的変化に伴う高齢者の心理」も捉えることができ、高齢者擬似体験を通じて、高齢者の身体と心の両方を捉えることができていた。

さらに、『疑似体験から感じた心身の変化』を体感することにより、『必要だと感じた高齢者看護』を見出し、『自己の高齢者看護の振り返り』も見られた。清水、水戸、流石(2000)が、体験学習はレポートに記載させるのではなく、体験直後の体験者間の討論で、自己の感情に気づき、言語化することが重要であると述べているように、本研修会において、グループ間のディスカッションを行ったことは、高齢者の心身の変化を体感するとともに、今までの自分自身が行ってきた看護の振り返りを行い、必要な高齢者看護を見出すことができたのではないかと考えられる。また、高齢者擬似体験は、体験者ばかりでなく、介護者体験を行うことで、ケア提供者としての態度や介護者自身の戸惑いや不安、苛立ちなどの気持ちに気づくことができる(橋本、松下、多田, 2002)。本研修会においても、高齢者役、介護者役の両者を体験することで、必要な看護援助とともに、「依存ではない高齢者の姿」に見られるように、自分自身のこれまでの高齢者の見方の変換を行うに至ったと考えられる。

このように指導者研修会において、高齢者擬似体験を行うことは、高齢者の心身の変化を体感するとともに、自分自身の看護の振り返りを行う機会になり、高齢者の見方の変換、すなわち、看護者として自分自身に変化することあり、変化した自分をきっかけに、今後の高齢者看護を熟考し、学生指導に活かすためには意義あるものであるといえる。

## 2. 看護学生への期待と指導者としての関わり

看護学生への期待と指導者としての関わりに関するディスカッションの分析から、看護学生への期待は、『高齢者看護』、『自立に向けた援助』、『他職種との連携』、『看護学生としての態度』の4つに分類でき、指導者としての関わりは、『学習環境を整え

る』、『モデルになる』、『思考の導き』の3つに分類された。

看護学生への期待に関しては、老年看護実習を前提にしている指導者研修会であることや入院患者における認知高齢者の増加、研修会を実施した実習病院が、チーム医療を重視し、生活の中でのリハビリテーションを積極的に行っているという施設の特徴から、学生に対して『高齢者看護』や『自立に向けた援助』、『他職種との連携』を期待していると伺える。

また、『看護学生としての態度』は、「言葉遣い」、「挨拶の仕方」、「他者への配慮」など、看護者としても身につけておく必要のある態度であり、看護師としての職業観でもある。阿部、煙山、小笠原(2005)は、学生は看護師として職業観を身につけようとする途中であり、それらは指導によって身につくものでもある視点の必要性を述べている。一方、森下(2002)は、学生がすでに持っているべき資質と考えており、指導して導いていくものとは考えていないとの指摘もある。本研修会での学生への期待としての『看護学生としての態度』は、老年看護実習が前提であり、学生が関わる高齢者との年代の差や生きてきた時代背景の相違など含めて、相手を敬う意味もこめられているのではないかと考える。

指導者としての関わりに関しては、まず、初めて学生を受け入れることから、指導者は、学生が質問しやすい雰囲気、学生とコミュニケーションをとるなど自分自身の指導者としての態勢づくりとともに病棟全体の雰囲気作りなど環境づくりの姿勢が見られた。教育的環境は、物的な環境だけでなく、指導者自身も学生の学びを引き出す環境要因である(森ほか, 2004)。指導者が、まず、学生の教育環境を整えていくという意識は、これからの学生の学びに大きく影響してくるため、実習準備において、大学側として臨床と連携をとり、教育環境の整備に関わる必要がある。

指導者は、学生指導において、認知症の対応や高齢者に好感を持てるような対応を自ら学生に伝えたいという姿勢が見られた。また、高齢者の個別的な特徴などの情報収集の方法についても伝えたいという姿勢が見られた。臨地実習の場は、学生が臨床の知を獲得する場であり、その場で教えるということは、学生が自ら悩み考え、教師が示そうとすることの意味を学生がつかもうと努力する知的協力によって可能になる(藤岡、安酸、村島、中津川、

2001). また, 指導者や教員が学生にモデルを示すことは, 具体的な状況において行為する身体の意味の源泉を見る(藤岡ほか, 2001). したがって, 指導者が学生にモデルなることは, ただ知っている知識, 技術を示すだけでなく, 指導者が行う身体的な行為と学生の知識とが統合できるようなモデルであることが必要であり, 指導者研修においても強化すべき点ではないかと考える.

### 3. 研修会の効果

研修会の効果としては, 参加者のほとんどの者が役に立ったと回答しており, 実践の場や指導の場で役に立っていた. 特に高齢者擬似体験は, 加齢変化を加味した看護ケアの実践に活かされていた. また, 活用としては, 自身が体験した高齢者の加齢変化の特徴を看護計画に活かすなど, 高齢者の視点, 個別性のある看護にまで及んでいた. さらに, 老年看護の知識の再確認をすると共に, 学生指導の場では指導者自身が, 学生が高齢者理解できるような会話をすることができたと実感しており, 老年看護, 学生指導への自信につながっているといえる.

学生指導に関しては, 漠然とした実習のイメージが鮮明になり, 指導者としての自覚が芽生えていた. 黒田, 戸田(2007)は, 指導者研修会で病棟研修を行った研修生の学びの特徴として, 学生の立場を実感し, 学生の能力に気づき, 具体的な指導実践を知ることによって指導者としての役割を自ら見出したことであると述べている. 今回のアンケートは, 研修会後の実習終了後に行ったものである. そのため, 研修会に参加し, 学生指導していく中で, 研修会で得たことを活かし, 指導者としての役割の自覚につながったといえる. また, 『他者の意見を聞くことで別の視点を持つことができた』ことは, ディスカッションを通じて他者の考えを受け止め, 日々の看護実践における自分自身の視点の変化に気づいたものであり, 指導者研修は, 学生への実習指導に活かすことともに, 指導者自身の看護観の再構築にまで及び, 今後の施設における老年看護に対する価値変換のきっかけ作りになったといえる.

#### 研究の限界と今後の課題

今回の研修は, 勤務時間内での研修会であり, 参加人数の限界もみられた. 今後は, 施設側との調整を行い, 研修会開催の時間帯を考慮していく必要がある. また, 本研究は, 老年看護実習に関わる指導

者, 看護師, 介護士を対象に行ったものであり, 対象者のバックグラウンドに関しては調査を行っていないが, 職種, 経験年数にばらつきがみられた. しかし, 老年看護には看護師のケアだけではなく, 介護士の協働連携したケアも必要である. 今回の研修会は介護士が少人数含まれていたが, 今後は実習指導者に限らず, 経験年数, 職種などを考慮し, 多くのスタッフにも研修の機会を提供していくことも考えなければならない. また, 研修会で役に立ったことが効果的に活かせるためには, 一回限りの研修会ではなく, フォローアップ研修や継続的な研修の検討も必要であると思われる. さらに, 研修会での効果が, どのように学生指導に波及していくのか, 今後は指導者のみならず, 関わった学生の学習効果も視野に入れ, 研修会の効果の検討を行うことが今後の課題である.

### 結 論

今回, 初めて実習を受け入れる施設における指導者研修会の実施を行い, 研修会での内容とその後の状況から, 指導者研修会の意義と効果について検討した. 指導者は, 研修会に参加することにより, 自分自身の看護を振り返るとともに看護の価値の変換を行っており, 老年看護実習における指導者研修会を行うことは, 老年看護の質の向上, 学生指導にとって意義あるものであるといえる. また, 研修会の効果として, 学生指導の場で, 研修会で得たことを活かし, 指導者としての役割の自覚につながっていた.

### 謝 辞

老年看護実習指導者研修会に参加し, 研究にご協力いただきました実習施設の看護師, 介護士の皆様に感謝致します.

### 文 献

- 阿部 緑, 煙山晶子, 小笠原サキ子. (2005). 実習指導者から見た病棟看護師の学生への期待. 第36回日本看護学会論文集看護教育, 242-244.
- 荒井和美, 山本麻美. (2005). 看護師における老人の行動に対する認識調査～高齢者疑似体験を通じて～. 東海四県農村医学会雑誌, 31, 31-35.
- 藤岡完治, 安酸史子, 村嶋さい子, 中津川順子. (2001). 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック, (第2版). 医学書院, 東京.

- 橋本文子, 松下恭子, 多田敏子. (2002). 看護学生を対象とした高齢者擬似体験学習の意義～高齢者および介護者体験からの学び～. *老年看護学*, 7 (1), 95-102.
- 黒田るみ, 戸田 肇. (2007). 看護観の再構築と実習指導者像の形成を目指した研修会の実施とその評価－平成18年度に開催した「宿泊訓練」および「病棟研修」における研修生の学びの特徴－. *北里看護学誌*, 9 (1), 65-74.
- 森 麻美, 間可優子, 植田美鈴, 大野美登里, 岡崎公子, 山本浩一, 国實明美, 江口由美子, 柳生敏枝, 中條雅美. (2004). 看護専門学校と臨地実習3施設合同による臨床指導者研修会の意義. *第35回日本看護学会看護教育*, 136-138.
- 森下路子. (2002). 看護学実習の意義と指導者のあり方に関する質的研究－実習指導者講習会受講生のレポートの分析－. *日本看護学教育学会*, 11 (3), 1-16.
- 清水初子, 水戸美津子, 流石ゆり子. (2000). 老年看護学における教育方法としての体験学習. *山梨県立看護大学*, 2 (1), 73-85.
- 田中千裕, 浅尾真理子. (2004). 臨地実習指導者の育成－指導者を支える環境作りを考える－. *第36回日本看護学会論文集看護教育*, 259-261.

受付 2008. 8. 5

採用 2008. 12. 22